

7.15 summer 2025

〒810-0001福岡市中央区天神5丁目2-1

公益社団法人 福岡県美術協会(福岡県立美術館内)

tel 092-713-4200 fax 092-791-1472

E-mail: fasartseven@wing.ocn.ne.jp

https://fukuoka-ken-art-society.com/

X(旧 Twitter)@fasartseven

アトリエ訪問 木戸 龍一(彫刻部名誉会員)

—— 人の繋がりがり ——

「僕はね、勝手に、安永良徳先生を恩師と思っちゃった。」

木戸先生はそう言っていて、西公園にあった学芸大(現在の福岡教育大学)分校の頃を振り返った。

ある日、授業をサボって野球をしていた自分達を、凄く大声で怒鳴りつける先生が居た。それが当時講師だった安永良徳だったと言う。その豪胆な性格に惚れこんで、彫刻へと進む。卒業後も地行にあった安永のアトリエに出入りした。そこで彫刻家小田部泰久と出会い、さらに柴田善二が加わり、1962年の「第一回玄展」を開催し、1970年の「第一回九州野外彫刻展」へと続いていく。まさに福岡の現代彫刻の原点であり、その原動力を担ったと言える。

鳥飼八幡宮の中野正剛像を制作されていますが、そのきっかけは。

「修猷館高校の柔道部たい。」と短い返答の中にも、福岡の歴史を巡る繋がりがあふれている。藩校から始まる修猷館高校の歴史は古く、多くの偉人、政治家を生み出している。中野正剛は、中学時代に柔道場「振武館」を創設するほどの柔道家であり、その名の通り正しく剛毅に生きた政治家だった。



中野正剛像の制作では、伝記、文獻、写真に留まらず、戦前の映像を求め、信念のために突き進んだ時代の気運とその人となりに迫った。さらに鳥飼神社の設置場所の周囲の空間にも気を配ったという。(西日本文化No.513 福岡まちの彫刻めぐり(武田義明氏筆)参照)「中野正剛像」、「進藤一馬像」以外にも、護国神社の「平和の像」や「灰鋳犠牲者復権の塔(宮若市)」を始めとした数多くの具象彫刻のミニメントを制作、共同制作した。そのひとつひとつに「人との繋がりがり」と「物語」、そして「思い」があった。



●木戸 龍一 1937年生まれ

●その制作活動は、1976年、1977年の第12回および第13回現代日本美術展に出品。1979年には 第一回ヘンリー・ムーア大賞展そして1981年の第一回びわこ現代彫刻展では優秀賞と福岡、九州の現代彫刻のトップランナーとして数々の抽象彫刻を生み出したことで知られている。しかし同時に、数々のミニメント、肖像彫刻も手掛け具象彫刻家でもある。

(インタビュー:文 津田三朗 / 写真 小林敏夫)

「見えないものを見る」「見えないものを感じる」
抽象彫刻の制作では、どのようなことを考えて作られているのですか。

「目の前の形が、本当にそうなのかを疑うことから始まる。見る角度によっては、全く違った形に見える。直線に見えていたものが、実は曲線だったり、繋がっているものが断ち切られていたり」と、「今見えている形が、知っているようで虚像だったり、錯覚だったりする。そんな有り様が面白い。」と、アトリエの高みに並ぶ作品を見やった。

そこには、街角や展覧会で見たミニメントや作品の雛形や試作がスラリと並んでいる。奥の部屋にも、透明樹脂や鏡、ステンレス、鉄に石、木彫に留まらない様々な素材を用いた作品が所狭しと並び、それぞれが、「よく見てご覧。」と主張している。単純だけど複雑、複雑だけど単純という空間を、視点を違えたひとつの形にする。

「三次元(立体)やけど、見るものにとっては幾通りにも見える。そんな空間と視点の可能性が加わって、1次元たい。」

見たことのないもの、見えないものを見ようとする眼差しのまま、87才を迎えられた木戸先生。具象と抽象の枠を超えて、更なる作品を追い求めて、「まだまだ歩かないかん。」と言うと、アトリエの作品達が頷いたようだった。